

浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月七日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌)第三五二号
昭和四十一年十月二十五日 印刷 昭和四十一年十一月一日 発行

第三十二卷

第十一号

スケールの大らかさ

仏頭（木造）

興福寺蔵



畏敬する人物のまえに立ったとき、自分はちっぽけに見え、逆にその人は大きく威圧されそうになることがある。たとえば、相手が自分より背が低くても、やはり巨大な感じを受けることがある。スケールの大きさをひしひしと感じ、より私淑し、より尊敬する気を起こさせて行く。そのような度量の大きさ、スケールの大らかさを、いにしえの人は丈六という人間の三倍近い仏像を、ほとけの標準にしたものであろう。遠くからも拜めることは儀式的な意味だけではない。ほとけの徳のすばらしさをも象徴している。

一メートルをこすこの仏頭はあきらかに丈六の仏像の一部であつたのであろうが、いまはこれのみを残している。鼻梁の端麗なこと、眼の力強さ、頬のまるみ、髪（螺髪）や髪ぎわの手法は同じ興福寺に残る運慶やその門弟の手になった、みほとけたちと同じ様式をしているのは、やはりこれらのすぐれた仏師によつて作られたからであらうか。それにしても、このみほとけの全貌がそこにあつたら、わたしなどはそれこそ威圧されてしまつて肝心なことは忘れてしまふだらう。仏頭だけをしみじみと拜んでやつとこんな感想がいえるのだから。



念仏往生は、機に当り、
時を得たり。
感応あに唐捐ならんや。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「風景」松濤達文画

随想	内山憲尚・赤尾敏弘・山田竜紀.....	(2)
特集 社会福祉に生きる		
教令転身の生涯	吉野 翠幹.....	(4)
善意が善意を生む「十六年」	小川 金英.....	(10)
保護司の役割	堀 要.....	(12)
— . — . — . — . — . — . —		
お経の話 経典の目的は念仏流通.....	村瀬 秀雄.....	(14)
黒本尊記 (1).....	鶴田 湛泉.....	(18)
現代語訳 歎 仏 頌.....	吉田 定久.....	(21)
古河城主 土井利勝 (1)	藤井 亮彦.....	(22)
— . — . — . — . — . — . —		
三身即一の阿弥陀仏 (1).....	岡本 薫.....	(24)
無媒随録	須藤 隆仙.....	(27)
人生相談 家庭における親と子のあり方		(20)
ご法語をいただく		(31)
信仰の手引 怠ることなく精進せよ		(33)
連絡 話 みんなの法然さま・往生をねがう人.....	高橋 良和.....	(28)

想

随



ソ連のこどもたち

内山 憲尙

聞いて極楽 見て地獄

ソ連は生活物資にまで手がまわらず、衣食の関係は豊かでない。子どもなどもよれよれの服を着ているものが多く、ナホトカやハバロフスクの町では八・九才の男の子で靴をはいてないものも二、三見受けられた。

珍らしいものを持っている外人を見ようとする子どもの心理はどここの国でも同じであるが、物珍らしそうに寄ってくる――。終戦直

りを持っている。

「貰ったのではない交換したのだ」

と、プライドを持っている。今から二十年前、物はないと言いながら、ジープからなげたチョコレート^{チョコレート}を奮い合って拾った日本の子どもとはちがっている。

ボールペンやチェインガムが自由に手に入る日本をよろこぶと共に、民族の誇りを持つ点は見習うべきである。

土にかえる心

赤尾 敏弘

私の住む丹波地方では、大がかりな墓掃除は年に二三回で、卯月、お盆、年の暮である。もつとも毎月か、さな家もあるが、中には年の暮を省いて、年二回がやっとという家もある。春秋の彼岸にしないで卯月八日前というのはい寸おかしいうだが、これが風習というものだろうか。お盆にはそれこそど

らかに眠っているという空気は感ぜられない。

静かに死なれたお釈迦様と、^{はりつけ}磔になったキリストのちがいののだろうか。

私は矢張り仏教の流れに浴しているからであらうか。安らかな静かな眠りでなければたえられないものを感じる。

こんなことを思いつ、又今年も無事お墓の掃除を終えると山あいの風が入涼しく肌に感ぜられた。

峠の茶屋

山田 龍紀

私は過日、友人と連れ立って、伊豆方面へドライブに出かけた。幸い天候に恵まれ、都会の騒音など忘れさせられるような快適な道程であった。

伊豆スカイラインを走っている頃は近くの山々のあい間をぬって、前方に初雪を冠った名山富士・左に駿河湾・右に新島・大島等々

後日本の子どもたちが、アメリカの進駐軍をとりまいて「ギブミー チョコレート」とやった時のことが思い出される。

ボールペンは、デバート（モスクワで一番大きい国営のグムデバートなど）でも売ってはいるが、なかなか子どもの手まで自由にまわらないらしく、非常に珍らしがる。

チュインガムはソ連では製造されていないらしく、とても珍らしがってほしがる。

「ヤボンスキー（日本人）ボールペン……」
「ヤボンスキーチュインガム……」

とか言いながら手を出してくる。

ところが、ボールペンやチュインガムをやると、ポケットから粗末なバッジのようなものやペンダントなどを出して、とってくれと手渡してゆく。日本で買えば二十円くらいのボールペンをやったら、十カペークの紙幣をもった人があった。十カペークは日本金の四十円である。

彼等は、人にただで物を貰うことは乞食であり、恥すべきだと考えているのである。家庭でもそう教育されており、民族としての誇

するほどきれいになる。

私も寺代々の住職の墓地は、自分で掃除することになっている。蚊にくわれながら、汗をびっしょりかいて掃除するのは仲々大変だが、あたり一面にしぐれる蟬の声を聞いて、手を動かしていると、寺の昔のことなど想像し、過ぎ来し寺の歴史の長さを思い、しばし魂の故郷へ帰って行くような思いになる。

二百年ぐらい前の墓石は彫った字もはつきりしているが、それ以上になると丸い石だけが、長年の風雪にさらされて、静かに眠っている。喜怒哀楽、何も語らずに黙然とならんている。やがて自分自身もその列に加わり、土に帰って静かに眠るのだろう。

この四月ミラノのシミテロ、モニュメンタリの記念墓地を訪れた。それは名士や富豪の墓であるから、誠に立派で、その彫刻は精巧を極めていた。ブロンズあり、大理石あり、石塔ありで美術館というのにふさわしい。特にその像がキリストのはりつけの姿、キリストを介抱する姿、亡き子の前に泣き叫ぶ親の姿等、みんな苦悩と悲哀の姿なのである。安

をうかべた相模湾、また周囲の草木など眼前にくり広げられるパノラマはことばではいい表わせない程に変化に富み、充分に満足の得られるところであった。

周囲の景観に見とれるうちに車は民家が十軒ほどある谷間に差掛った。見覚えのあるところである。その中に、いつもそこを通る際確らず立ち寄る茶屋があるからである。

「峠の茶屋」というこの茶屋はその周りの自然の中にマッチしたたたずまいを見せていた。

普通の家を改造したと思われるこの茶屋は藁葺の屋根で、内は田の子型の間取りで土間でその土地の収穫物を料理して食べさせてくれるのである。特にその土地風の味つけの山芋を主とした山菜料理は都会では味わうことのできないものであった。

近頃地方へ出かけると自然さを破るような奇抜なレストハウスが建てられ残念であるが、私はこの茶屋で憩う度に何か自分が自然の中にとけこむがごとくに何ともいえぬ安堵感がただようのである。

《特集》 その一

長谷川 良信先生を憶う

教令転身の生涯

吉野 翠 幹

結核と闘う青年良信

長谷川良信先生は病氣を決して軽視しなかった。もしそうでなかったら先生の一生はなかった筈である。それでいて病魔に対して少しも恐れるところがなかった。だからこそあれだけの大事業を成しとげ得られたのであった。病魔と事業を向うに回して、己が天命を忠実に貫き、理想への情熱をもやし続けてきたのが先生の一生であった。特に晩年になってからの苦闘ぶりは、まさにすさまじいものがあった。

世間ではよく先生のことを頑健な身体をもっていたと思っていた。それで挨拶がわりに「先生はお丈夫です」と面と向



ありし日の長谷川先生



って感心する人が多かった。なるほど元気で活躍し、休むことを知らない先生をみると、たしかに身体が丈夫であったからこそできたのである。しかし、その健康さは決して先天的な恩恵によるものではなかった、こう挨拶される度に先生は言葉少なく、何も仰らないことが多かった。簡単には説明しにくかったからである。

先生は二十五才で宗教大学を卒業した。当時は小学校が八年、中学が五年、大学の予科本科で六年を要したからである。卒業するとすぐ東京養護院に勤務し、ここで社会事業の第一歩をふみ出したのであるが、ここでの仕事は多忙を極めた。院生を教育するばかりでなく、個人的な指導から世話に



己に志あり、志を成すに在り
志を成すに在り、志を成すに在り
志を成すに在り、志を成すに在り
志を成すに在り、志を成すに在り

至るまでの仕事があり、院の事務まで引受けることになって昼夜の別なく働かざるを得なかった。これだけでも背負い込みかねる仕事の量があったのに、先生はその間に「日本社会事業の現状」その他

の論文を発表していた。いつこれだけの仕事かできたのかわぬ位の激務が続いたが、それがたたって、二十七才の春に胸部疾患に侵され、遂に咯血するまでに病勢がすすんだ。もとより医師からは絶対安静を命ぜられ、養護院を辞めて治療に努めることになった。

当時の結核は不治の病であったから誰でも悶々の内に闘病生活を強いられるのが当然のことであった。ところが先生は病床に静養するばかりで何もしないでいる人ではなかった。この間に「仏教社会事業大観」を刊行し、または「最近社会事業潮勢」その他の論文を発表し、これだけみても常人以上の業績と思われるものをあげていた。そのために先生は病床にありながら読書と文筆に夜を徹することが珍しくないという有様であった。

こうした不撓不屈の精神はもって生れた性格であった。例えばこんな事があった。生地の実壁小学校を卒業した時はたしかに優等生であったが、芝中学校に入学してみると、他にも秀才はいくらでもいた。特に語学の点については東京の子弟の方がはるかに勝れていることを知らされた。それに発奮して先はある夏、独り英語塾に通って勉強した。そのかいあって、休暇があけてみると一躍にして英語の優等生になってしまい、教師を驚かせたことがあった。

隣保事業を創める

さて先生は静養らしからざる静養を続けたのであったが、幸い翌大正七年には病氣の方は小康を得た。そこでこの年の十月に通称二百軒長屋と呼ばれていた西巢鴨に移住した。このスラム街は宗教大学に隣接してあったので、先生は早くから都市貧困問題に関心を示し、ここに一生を捧げることこそ己が天命であると考えていた。早速それを実行したわけであるが、後になってこの地を第二の故郷と定め、長々そこに住んだばかりでなく、たとえ住居を変えた後になっても、対外的な現住所をそのままの地番で押し通してしまった。このことをみても、心は常に西巢鴨に住んでいたことが判るし、貧困敗済の情熱がいかにさかんであったかを知るのであった。

そして翌八年一月には「マハヤナ学園」を創設した。その創立趣旨書の冒頭には次のように訳されていた。

「荒涼たる人生に一脈の清流を導き来るものこれ実に隣保事業である。

人類相愛の本性に則り、多幸なる者、恵まれたる者が、薄幸なる隣人、恵まれざる隣人に対して感恩相資の燈火をささげ、温き互の心を頒つ所にある。個人より家族に、隣邑にお互同志一如の靈光に触れ合う所、これその基調をなす」

二十九才の先生が高く掲げたこの旗標は、先生の一生を貫

き通した信念であった。マハヤナ学園は不就学児童の夜学、近隣の代書、人事相談等について活動を開始し、常にスラム街に住む人々の片腕となるよう努めた。「隣保事業とは何ぞや」を刊行し、「現時わが国において如何なる児童保護事業の施設を急務とするか」等の論文を発表したのはその頃のことであった。

このようにしてスラム街のまん中に住み、人々の世話をし人々を激励しながら、先生はどうしたならば貧困から抜け出し、スラム街をなくすことができるかの方法についていろいろと考えてみた。しかし昼夜をわかたぬ活動を続ければ続ける程、貧乏の根強い力を感じないわけにゆかなかった。スラム街を解消させることは不可能の事であると思われるようになった。

それならその原因は何か。先生はその原因の最も大きなものに、女子教育の低劣さがあることに気がついた。スラム街の子弟は、生長して一人前になったならば、親の住むスラム街に居残ってはならぬ。それを救う道はただ一つ女子の教養を向上させることしかないと考えた。それに引きかえ現実にはスラム街に住む母親たちの教養は驚くばかりの愚劣さを示しこれを一体どうしたらよいのか。

先生は大正十一年（三十二才）に内務省囑託として外遊し

シカゴ大学社会事業科、ペルリン女子社会事業学校に学んだが、関東大震災を聞いて急ぎ帰朝した。そしてその翌年大正十三年に隣保事業の延長として、大乘女子学院（夜学）を創設し、スラム街の対策の根本問題である女子教育にのり出すことになった。

これが先生の教育事業への第一歩であった。やがて先生は大乘淑徳学園を創立することになり、同学園は今や大学一、短期大学一、高等学校三、中学校二、小学校一、各種学校三幼稚園三、という一大総合学園に成長し、これを経営するまでになったのである。

ここで一言、先生の海外での活躍にふれば、昭和二十八年にブラジルに渡航して、サンパウロに「日伯寺」を創設した同三十二年にはブラジル第二次渡航を行い、日伯寺学園を開設して、日本語学校や老人クラブを開いて、日系開拓者への福祉事業に着手した。更に「イタケーラ子供の国」を開設して、現地人の精神薄弱児を収容する施設とした。この施設は今ではブラジル国の公認する法人となり、これを後援するパウリスト児童療護会が組織され、会員二千五百人を数えている。

文化苑の構想なる

このように遠くブラジルにまで活躍の手をのばしていた先

生は、七十才の齡を迎えた頃から胃潰瘍のような兆候が見え始めた。その後もとかく身体に異状をおぼえるようになって、昭和三十七年精密検査を受けたところが、高血圧と胃病の診断が下された。事実それから間もなく胃潰瘍による咯血があった。

本来ならばこれだけで再度の静養に入って事業から手を引くのが普通であった。ところが先生は同じ年に、ブラジル第三次渡航に出発し、かの地の国際社会事業会議に日本代表として出席し、続いてアメリカの国際文化会議にも出席した。

しかも帰朝すると直ちに、淑徳創立七十周年記念式典を東京都体育館で開催したり、歌集「流星」を刊行したりして相変らぬ活躍を続けてきたのであった。

そして翌々年、昭和三十九年には先生の生涯の結論ともいうべき大蔵寺文化苑の構想に着手し始めたのである。先生は社会事業と教育事業と宗教活動との三つが一体となってこそそこに初めて仏の心の具現があるという信念をもっていた。

この場合、大蔵寺という名刹が信仰道場として中心となる。その周囲に淑徳大学社会福祉学部を開設して、多くの学研の徒が集まり、学術的研究を行う。そして実践面としては人事相談所、隣保館、老人クラブ、料理学校、幼稚園等が開設される。また一方には総合運動場、体育館、プール、パン

ガロー、郷土史料館等において、これを広く一般に開放し、地域社会の発展に貢献する。

こうした内容が文化苑のあらましであるが、こうした構想は実は古く聖徳太子が四天王寺を建立し、そこに施薬院、悲田院、療病院、敬田院をおいて布施したことを範とし現地に再現させようとして考えられたものであった。

事実また、この年には大学設置の申請書を文部省に提出し大学本館四階建の工事が八部通り完成し、大学図書が続々入荷するという有様であった。その今にも運動場、隣保館等の施設が次第にでき上り、大巖寺に景観を添える大梵鐘の鑄造竜沢園の構築も夜を日について急がれていたのであった。

こうした中であって、「自分は僧侶である」という理由を以て、再度叙勲を辞退したが、これまた当時の先生の心意気を物語るものであった。

翌四十年春、宗祖上人御忌と恩師渡辺海旭先生三十三回忌と大梵鐘の供養会を厳修したが、多くの来賓と学園各校代表で、さしも広い境内を埋めたことは、先生の最も満足された一日であったに相違ない。

淑徳大学の設置認可があり、四月二十八日に秩父宮妃殿下の台臨を仰いで開学式が行われた。この日は折わるく私鉄のストライキのために車が動かなかった。それにもかかわらず

定刻近くなると大講堂を埋め尽す程の来賓を迎えることができた。この日壇上にあった先生の目は涙でキラキラ光っていたのが印象的であった。

この頃から先生の健康は目にみえて衰えて行つた。しかし先生はゆっくり静養することを肯じなかった。家人の勧めで入院することがあつても、少しでも体力が回復すると自分から退院してしまつた。先生はいつも

「自分は僧侶であるから、いつ死んでもよいと思つているし安心してゐる」

といつてゐた。それと同時に

「自分が最も僧侶らしい僧侶として生きるためには文化苑を立派に完成させなくてはならぬ」

ともいつてゐた。一方では漸く緒についた文化苑の完成につとめ、他方では東京のマハヤナ本館の復興のことを思うと、静養したくてもゆっくりしている時間が惜しかつたのであると思われた。一生をかけてここまで到達した事業を、自分の命のある間に一步でも二歩でも前進させたかつたのであると思われた。

「基礎だけつくっておけば、若い諸君が必ず完成させてくれると信じてゐる」

というのが口ぐせであつた。

教輪尊者の号令

昭和四十年七月、大巖寺では学園各校の夏季合宿で混雑していた。この合宿は短大、高校のグループからなる幾つもの班が、大巖寺広間と大学施設を利用して交互に行うものであった。先生はこの生徒たちを直接指導し、そのかたわら暇さえあれば完成が遅れていた「海雲プール」の工事監督に出向いていた。そして遂に猛暑と過労のため病床についてしまった。

先生は一枚の色紙をとりよせ、「為」と大きく書いてからそのわきに次の句を記した。

「乙巳七月 宿業之転起 如暴坑 教輪尊者 威嚇号令 更如一事 今為乃敢掲床前焉」

先生は記し終ると、これを病床の壁にかかげさせた。まさに自策自励のためであった。宿業のしからむところ、心ならずも病床について動くことができなくなってしまった。しかし自分に課せられている仕事は目の前に山積している。こゝろを廻してくると、いつものように不動明王の叱咤激励が聞えてくるように思われた。

「教輪」は教令輪身の略である。つまり如来が慈と怒との両面に身を現して、相手によりあるいは慈、あるいは怒を以て衆生を教化することである。ここでは不動明王のことである。

先生は平常から不動明王に篤く帰依していた。

大巖寺にまつる不動明王は、開山上人に利剣を吞ませ、上人の鈍血をはかせたといわれ開山上人の護持仏であった。寺には今でも吞血の衣が秘蔵されている。

先生は大学を建てた。庭園を二河白道にみたてて改修したその他多くの工事を完成させたが、最後に残る大工事は不動堂の再建であった。「あらためて一事の如し」とあるのは、恐らくはこのことであつたろうか。また「為」は思念するという意味と治療するという意味の二通りがある。

やがて先生の宿願がかなって、秋おそく不動堂再建に着手し、一五九平方米という堂々たる不動尊聖堂が完成した。翌四十一年五月二十八日に盛大な落慶供養を営むことができた。

その後はさすがに病床に身を横たえる日が多くなった。それでも尚気分は少しも変らなかつた。一方では学園第二次計画をおしすすめ、他方では淑徳大学、大正大学、淑徳短期大学の三大学連合京葉地域綜合調査団を組織して最後までその指導に当たっていた。ここ数ヶ月以来、足部に現れていた水腫は次第に範囲を拡げて行つた。いよいよ宿痼が高じて七月二十一日に東京女子医大附属病院の心臓科に入院したが、時機はすでは遅く、八月四日払曉極楽浄土に往生された。合掌。

「善意が善意を生む十六ヶ年」

——その後のよるひる銀行——

小川金英

(花巻松庵寺主職)



私共の社会に繁昌していゝものと、繁昌してほしくないものがあるとするなら、私の寺にある、低所得階層対策の一端として生れた、よるひる銀行などは衰微するほうが、否不必要、閉店となるほうが好ましいのだが、残念乍ら、開設以来十六年目を迎えているが、繁昌し過ぎて困っている。勿論一ト口に十六ヶ年と云うがその間、経済事情や社会生活の遷り変りと共に創業当初の姿とは変つて来ているが、兎も角利用者が多く大いに活用されている。その間生活にあえぐ人々、途方に暮れている人々八千六十二人、金九百五十四万九千四百四十五円を貸出し、更生の意欲を起す

よすがとなっている。経済事情の変動と共に百円から三千円までの限度で貸出していたものが現在では五百円から一万円まで、特別の事情によつては三万円までは、無利子、無担保、無期限（勿論六ヶ月から十ヶ月払と云うことになっているが）で、申込様式も居住地の民生委員の申込書一通で安易に貸出するのですが、こうして利用者に便宜に取扱はれているのも、地元はもとより全国各地からの善意によるものでして、ことに温い愛の定期便とでも云う様に毎月送金あり、これ等の善意が創設以来二百四十七人のお方から九十万四千八百九十八円也と九千二百四十六点に及ぶ金

品が寄せられ、善意が善意を生み、そして善意を後に今に育て、来ていることに尊さを感じ又励まされている。この銀行も、はじめの頃の思いとしては、対象者の現状からやってあげねばと云う、善意のつもりの熱意が、相手の欲する求めに應じてあげると云うこの事に鋭意をもちい、且つ自らもそうすることに満足感を覚えていた。偶々切角こうした努力をおしまずにやっているのに、相手は感謝の心も示さず、かえつて批判めいた事や当然だと云うかの様な暴言を耳にすると、腹が立つて、こんな心に心を寄せているのに何んとした事かと憤慨されることもあったが、いつと無

しに、その腹立たしさも忘れて、こちらに礼をも云わぬ方を見ると、更生への道が進んで、そろ／＼この銀行に用がなくなつて来た

ようだとさ、やか乍ら喜びを感じる様になつた。然ししてやったの独りよがりや優越感的自己満足でいいのだろうか、この銀行には従前のべたように、差出人の名をしらせない無名の手紙と現金送附が非常に多いことである。消印をたよりに見るには北は北海道から南は鹿児島に至るまで、殆んど全国都道府県に涉らぬ個所が無いと云う程です。中には小中高校生諸君がお小遣を貯めて出したと云うお金、又キリスト教徒や天理教等の宗派を越えた善意に励まされて、やめるにはやめられず、追われる様に只運営しているに過ぎなくて、善意の御蔭でやらせて貰うている、と言う、感だけになつていた時もあった。然ししてやったでもなければ、他人の善意に只動かされてやっているのでもなく、これの対立的な感じからぬけて、只大きなみに生かされる身の、この道を通してなさしめ賜う大みわざに、この私ごときものにはなし得がいこの業をさせていただいてと言う、法

悦感に、只念仏申させていただいて思いで、今日ささやか乍らあゆませてもらうてい

る。
十六年前この銀行の利用者であつた、当時生活にあえいでいた、お得意が、立派に立上つて今印刷業の店舗をはっている。失業に惑うていた七年前のあの人は今自動車の修理工場の主人として四人の職工と共にいそいそと働いているし、親子六人心中でもと言う寸前の流れ家族が今小型トラック二台を動かして親子で働いている姿も毎日の様に町に見る頃の頃である。又門前に待たして置いてPTAの会費や、学用品代を借りて行きゆきした母子、その子は今大学に入つて、今年のお盆にお寺の盆踊に楽しそうに踊っていた。嫁入の費用に特別に用立ててあげた、母子世帯のあの娘はもう二人目の子をもって初詣りの日地藏様に手を合していた。

十六ヶ年の歳月は泣き笑い、苦楽こももだが、八千人余の人々が、ささやか乍ら、誰れも相手にしてくれぬと言うひがみの中から、希望と光りを得、苦難を乗り越える力を得ている姿を目にする時、心ひそかに嫌しさを

感じている。私のお寺には何故困る方々ばかり来るの、といつも暗い話し合いのみ目にし耳にしていた三女が高校を卒業し市内の金融機関にこの春から勤めているが、ここ二年程前から、このよるひる銀行の事務を買つて出て、奉仕をしてくれている。

新興宗教にこつた主人が家に帰らず生活苦と信仰にまどう妻が今日も訪れて来た。お金を貸すことと共に心配ごと相談と言う大事な仕事と、教化と言う重要な活動が、こんな銀行の窓口に大きく働られるこの頃である。昨日から日立の老婦人（五年前からの善意の株主）がこのよるひる銀行を訪ねて来られ、利用者の家庭を四、五軒慰問激励して下さったが全く感激の極みである。

念仏の寺よるひる銀行は、多くの善意と愛情の株主によって、底辺にあえぐ人々の光と力となり善意は善意を生み、善意を育てつつ十六年の歩みをつづけている。

花巻市双葉町松庵寺仏教福祉

センター

保護司の役割

堀

要

（静岡春心荘院長・医博）

更生保護のために、あやまちをおかした青少年たちを、もっと社会が温かくむかえてほしいということを要求することは、決して間違っていないし、また、そのように啓蒙することとは大切なことでしょう。せっかく更生しようとしている青少年が、社会にうけ入れられなくて更生できなくなるのが、あまりにもしばしばおこる現実があることはたしかです。

しかし、このことをもって直ちに、社会がつめたいとのみ判断することが果して当を得たものでありましようか。このような判断は、私にはあますぎると思われるのです。このような甘い判断による啓蒙では、いささかセンチメンタルな人々の数を少しだけ更生保護に関心をもたせ得るにしかすぎないと思います。

かつて、ある保護司の研究会の席上で、ある保護司が、「社会が、保護少年のためにあまりにも冷たい。これを何とか啓蒙すべきである」と主張されました。それで、私はこの主張に対して、つぎのように反 Pak したものです。「あなたは、保護司となって、保護少年の味方をするようになって、はじめて、いかに社会が冷たいかに気づかれた。しかしあなたは、保護司になるまでは、その冷たい社

会の一員ではなかったのでしょうか。いまここに一人の少年を、やといたいと思っている人がいる。そこへ二人の少年が候補者となった。二人とも大体よく似た人物であるとする。ところが前歴をしらべて、一人は少年院出身であり、ほかの一人はなんら前歴がないとわかったとする。その人が、二人の少年の一人をえらぶとき、前歴のある少年をさけるのは、一体冷めたい態度なのであろうか。強いて前歴のある少年をえらぶように一般社会を啓蒙することとが果して啓蒙といえるのであろうか」と。

啓蒙とは、蒙を啓くことである。この仮定したやとい主の態度は明であり蒙ではないと思います。啓きようがないのではないでしろうか。

更生保護の困難さは、社会の冷たさにあるのではなくて、社会の正当な要求に答えるために、普通以上に芯のある人間をつくり出さねばならないところにあると、考えるべきではないでしょうか。

○

保護司は、親の代行をつとめることは原則的にできません。私は、むしろ親の代行をしてはならないと考えます。親の代行をしようとしてできるものではありません。強いて代行しようとするならば、親と子との間の溝が保護司と少年との間にできてしまいます。保護司は、少年のために、その親を尊重すべきです。たとえ、親子関係が調整できなくとも、少年の心の中にひそむ親を尊重しなければなりません。

しかし、保護司はあくまでも少年の味方です。少年の味方となって、少年が、その心の支えを自ら見出すための援助をしてやらなければならないと思います。保護司自身が少年の心の支えとなることができればよいが、必ずしもそれが可能とはいえません。むしろ少年をして、保護司以外のところ、心の支えを見出すお手伝いをするのが本来の役割であると考えてよいのではないのでしょうか。

保護司は、少年を上から教え導く者であってはならないと思います。就職の世話をし、社会を冷たくうけとる少年に、

社会が冷たいのではないことに気づかせる世話をし、くじける心を味方となつてはげまし立ち直らせ、少年が何回失敗しても、見すてない唯一の人であることを体験せしめ、少年が自立して社会に立ちむかうまで、つかい棒になってやらなければならぬと思います。

これは大変な仕事であります。しかし、保護少年には、ぜひ必要な人なのであります。

私はかつて、多くの非行少年に接しているとき、少年たちの多くはしばしば、「今度は真人間になる」という言葉をつかいます。私はこの言葉をきくのがつらかったのです。それは、大人たちによってそこなわれた少年の心をあらわしているからです。私はいつも、これをきくとききかえしました。

「それでは君は真人間ではなかったのか」

と。すると、少年は、わるいことをしたのだから真人間でない、といいます。そこで、さらに、私はききかえしました。「君は人間でないなら何か。人間ではないのか」と。すると少年は、人間だと答えます。そこで、私は云いました。「そうだ、人間だ。正真正銘の人間だ。真人間だ。これから真人間になるのではなく、今までも今も真人間なのだ」と。

（お経の話） その十

―観無量寿経（四）―

經典の目的は念仏流通

村 瀬 秀 雄

極悪人こそ問題

經典はいろいろと大切な点について指示を与え教説して、次にはいよいよ凡夫往生について論旨を進めることになりました。しかしここにいう凡夫というのは、広い範囲の意味をもつもので、中には実に勝れていると思われる人々を含めています。

經典は凡夫を分類するのに、大きく三つの群に分け、これを細分して九種類の型に分けています。最初の一群は、大乘經典を信じ、修学し、併せて極樂浄土に往生することを願う人々であります。これに上善の人、次善の

人、下善の人とに細分して三種類としています。また次の一群は、小乘經典を信じ、よく修学し、よく戒律を保って、併せて極樂浄土に往生することを願う人々であります。これを細分し上善、次善、下善の三種類とすることは前の群と同様であります。

最後の群は悪をつくる人々のことであります。これまた上中下の区別をしますが、要するに程度こそ相違しても悪は悪であります。例えばその第一は

「衆生あつて、もろもろの悪業を作る。方等經典（大乘の經典）を誹謗せずと雖も、かく

の如き愚人、多く衆惡をつくつて慟愧あることなし」

要するに多くの惡をつくつて少しも恥じない人々であります。

その第二は

「衆生あつて、五戒八戒及び具足戒を毀犯す。かくの如き愚人、僧祇物をぬすみ、現前僧物を盗み、不淨說法して慚愧することなく、諸惡業を以て自ら莊嚴す」

要するに仏教の戒律を守らぬというより、積極的に惡を行う人々であります。僧祇物というのは教団が共有する財産であります。現前僧物というのは、僧たちが共有している生活上の必要物資であります。また不淨說法とは、名聞や利益を目的として說法することです。あります。多くの惡をもつて自分を飾りたてるといふあくどい惡人のことであります。

そして第三は徹底した極惡人です。

「衆生ありて、不善の業たる五逆十惡をつくりて、諸の不善を具す。かくの如きの愚人、惡業を以ての故に、まさに惡道に墮して、多劫を経歴して苦を受けること窮りなかるべし」ここに五逆というのは父を殺す、母を殺す、

修行者を殺す、教団を破る、仏身に血を流させるの五つで、最極悪のことです。また十悪とは殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語（不正をいう）悪口、両舌（二枚舌）貪欲、瞋恚、愚痴の十であります。

このように凡夫にも多くの種類があります。第一群や第二群は問題になりませんが、第三群の第一と第二はまだよいとせねばなりません。問題は最後の極悪人についてであります。五逆重罪の人は、永久に救われることなく、地獄に沈論していればよいのでしようか。人間同士なら自業自得ですまされるかも知れませんが、阿弥陀さまの目からみれば決してそのままに捨てておくわけにはゆかないのであります。

念仏は王三昧なり

仏さまの大慈悲は広大であります。阿弥陀さまの光明は十方を照しています。たとえ極悪の人々であっても、これを見捨てることはありません。問題はぎりぎり一ぱいの所にきました。經典は、この極悪の人々に対して、十遍だけ南無阿弥陀仏とお念仏を唱えよと教

えられ、そうすれば極樂浄土に往生できるところを明示されました。經典を引用しましょう。

「至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に、念々の中に八十億劫の生死の罪を除く。命終の時に金蓮華の猶し日輪の如く、その人の前に住することを見る。一念の頃のごときに即ち極樂世界に往生することを得る」法然上人はお念仏を万病を治す多薬にたとえています。

「彼の無明淵源の病は、中道府藏の薬にあらざれば、即ち治することもわざるが如し。今この五逆は重病の淵源なり。またこの念仏は多薬府藏なり。この薬にあらざれば何ぞこの病を治せん」

また更にお念仏は極悪人だけのものではなくすべて一切の凡夫が唱えれば、これによって極樂浄土に往生できるということを、やはり不死薬（阿伽陀薬）を例にして述べ、一切の凡夫が救われるが故に、念仏を王三昧と名づけておられます。

「念仏三昧は、重罪尚滅す。いかに況や軽罪

をや。余行は然らず。あるいは輕を滅して、しかも重を滅せざるあり。あるいは一を消して、二を消せざるあり。念仏は然らず。輕重かね滅し、一切遍く治す。たとえば阿伽陀薬の、遍く一切の病を治するが如し。故に念仏をもって王三昧とす」

お念仏が何故不死薬かといえは、お念仏が一切の罪障をとり除くからであります。

またここに「十念を具足して、南無阿弥陀仏と称せしむ」とある一句から、法然上人は十念を定義づけて、お念仏を十遍唱えることであるとされたのであります。

「声は是れ念、念は即ち是れ声なること、そのこころ明けし」

といわれ、念と声とは同じ意味であるときれました。

第十八願除外例の意味

このようにお念仏によって五逆十悪という極悪の人に至るまで救われるのであります。さてこうなると、無量寿經の第十八願の除外例が問題になります。

即ち第十八願において、阿弥陀さまはお念

仏を唱えるものは必ず救うことを誓われましたが、その際に「ただ五逆と正法を誹謗するを除く」という除外例がありました。このことは一見するに矛盾するように思われます。この点については善導大師のご解釈をまたねばなりません。大師は次のように説明されています。

大經にある誓願は、阿彌陀さまが将来のこのについて誓われたのであって「ただ五逆と正法を誹謗するを除く」といわれたのも、現に五逆や正法誹謗の罪を犯していない者に対して説かれたのであります。従ってかかる者が今後とも五逆や正法誹謗という罪を犯さないように警告する意味を以て、かく説かれたのであります。この一句は犯罪を予防するという趣旨から出たものであるから、これを抑止門といえます。

ところが観經の場合は、大經と違って、すでに五逆や十惡という極惡の罪を犯してしまった者を含めた一切の惡人を相手として説かれたものであります。たとえ五逆を犯してしまつた者といえども、お念仏を唱えれば、お念仏がすべて罪障を消去して下さるという功德

によつて必ず往生できるということを説いたのであります。このように一切の衆生を包括して救つて下さることを摂取門といひます。

更にまた観經では、正法を誹謗した者に対して言及していませんが、これまた極惡人の一人として包含されているのです。それなら何故に観經が言及していないのかというと、観經はまだ正法誹謗の罪を犯したことのない者に対して説いているからであります。今かりに正法誹謗の罪を犯した者があつたとしても、その者がお念仏を唱えるならば、その罪も同じく備えて極樂淨土に往生することができるのであります。

以上は善導大師のご解釈であります。しかしながらもし罪の輕重を問題にする必要があるとすれば、それは法律上の問題であつて、信仰上の問題ではありません。五十歩百歩という喩えの通り、輕罪の者が重罪の人を侮ることはでき得ません。經典には阿彌陀さまが念仏行者に次のようにいわれたと述べられています。

「善男子、汝、仏名を稱するが故に諸罪消滅せり。我來りて汝を迎う」

信仰は阿彌陀さまのこのお言葉を信ずるだけであります。決して他の罪を自分の罪と比較したり、自分の方が善根が多い等と計算することとは違つたことであります。

現当二世の利益

念仏往生にまで説き進んだ經典は、括めとして次のように説いています。

「もし念仏せんものはまさに知るべし。この人はこれ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩勢至菩薩その勝友となる。まさに道場に坐すべきを以て諸仏の家に生ずべしと。仏、阿離に告げたまわく。汝よくこの語を持せよ。この語を持せよとは即ち無量壽仏の名を持せよとなり」

この一句が經典の結論であります。従つて全文をよく味わなくてはなりません。

お念仏を唱える人は、花に喩えれば分陀利華（白蓮華）のようなもので、一きわ勝れた人々であります。このことを善導大師は更にこまかく五通りの讃辭を呈して説かれ、法然上人はその讃辭を「五種の嘉譽」と申されました。淨土宗の戒名で譽号を尊重するのは、

ここからきています。

観音さまは慈悲、勢至さまは智慧の菩薩ですが、この両菩薩が念仏行者の勝れた友となります。勝友ということについて善導大師は念仏行者につきそい、影が形につきまとうように常にお護り下されるのであると申されました。法然上人は更に「二尊の影護を蒙る。これはこれ現益なり」と申され、念仏行者が現に受けているご利益であるとされました。

また次に続く句について善導大師は

「今生に既にこの益を蒙れば、命を捨てて即ち諸仏の家に入る。即ち浄土これなり。かしこに到れば、長時に法を聞き、歴史供養して因円かに果満ず。道場の座、実にはるかならんや」

と説明され、法然上人はこれこそ当益、つまり未来に受くべき利益であると申されました。このことを念仏行者が受くべき現当二世の利益といえます。

さて最後に、仏さまは阿難に向って「お念仏を後世に長く流通させるよう」と、おいつけになりました。ここに至るまで經典はいろいろのことを説いてきましたが、それは

それとしてお念仏だけを後世に流通させよと阿難に仰せられたのは何故でしょうか。善導大師のご解釈は

「上来定散両門の益を説くと雖も、仏の本願に望むれば、こころ衆生をして一句に専ら弥陀仏の名を称せしむにあり」

というのであります。更に法然上人は

「定散の諸行は本願にあらず。故にこれを付属せず。またその中において、観仏三昧は殊勝の行なりと雖も、仏の本願にあらず。故に付属せず。念仏三昧は、これ仏の本願なり。故にもって付属す」

と付言されています。付属は「いいつける」「依頼する」という意味であります。お念仏は阿弥陀さまの本願であるが、その他の全部は本願でないから、念仏だけを後世に流通させるようにと、仏さまが阿難にいいつけられました。それはそれでよいとして、それなら何故これ程までに長く、ていねいに諸行を説いてこなくてはならなかったのでしょうか。この点について法然上人は廃立の義という説をおたてになってこのように説き進んでこなくてはならなかったわけを説明されました。

新会員紹介

佐賀市金立町来迎寺

森 鶴代

茨城県古河市江戸町

木村 孝

〃 〃 〃

明石 哲朗

〃 〃 三神町

鷲尾 義市

島根県邪賀郡三隅町大字向野田 田原聖朗

名古屋市中村区藤江町四丁目 三枝樹亮成

〃 東区七小町遍照院 宇佐美練大

藤沢市渡内五四三 二 伝 寺

大阪市阿倍野区松虫通二丁目 谷口マコト

〃 〃 阪南町四ノ六ノ三 山下 良寛

〃 住吉区墨江西二ノ三一 井桁 進涼

〃 東成区大今里南之町三ノ叁 洗 心 寺

京都市中京区西ノ京鹿垣町三 石橋 真誠

〃 東山区林下町樹昌院 藤吉 慈海

〃 北区紫野上野町四六 三田 全信

〃 左京区田中門前町 百万遍知恩寺

〃 伏見区醍醐落保町 三輪 亮明

〃 左京区岡崎円勝寺町五 石井 ハツ

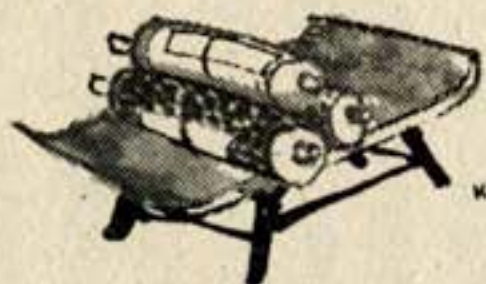
京都府相楽郡加茂町北 小松 説愍

中野区住吉町一四 春野 光旦

北区中里町四六 久保伊三郎

黒本尊記(一)

鶴田湛泉



その頃、十四、五才の眉目清秀な美少年の侍童が、家康に仕えていた。

成る日、彼が岡崎城下に姿を現わした時、水もしたたるような美少年であつたし、人品いやしからぬ素姓の高さもののばれるほどであつたので、家臣が連れて来て家康にお目見えさしたのであつた。

好ましい風采、女のような優美な感じを与える美少年を眺めて、家康もすこぶる満悦で直ちに召し抱えることとなった。頭も機敏によく働かし、立居振舞も水際だつて優雅な氣品があつたので、他の小姓達と共に身近近く侍らしてこよなく寵愛するに至つた。

ところが、豈に計らんや、この美少年は、実は武田勝頼が放つた刺客だったのである。

勝頼の父信玄と家康との抗争はしばしば行われ、元龜三年の春、両者は味方が原で相まみえ、家康は信玄の用兵の妙には敬し得ず大敗を喫しかろうじて身をもつて逃れたほどであつた。

翌四年、信玄は更に東三河に浸入して来たが、不幸陣中で病にかかり帰国の途中、四月十二日、信州下伊奈郡駒場に於て五十二才で

空しく歿してしまつた。

信玄の子勝頼も、父の志を継いで依然として、遠江、三河へ侵略をつづけた。この時から天正十年三月十一日、天目山で勝頼が自刃し、武田氏滅亡するまでの前後十年間というもの、家康としては勝頼との抗争に終始したといつてもよいほどであつた。而し勝頼の兵鋒は甚だ鋭く攻勢はつづき、家康は絶えず守勢に追いこまれ、辛うじて三河、遠江を維持し得たほどであつた。

しかし長篠に於て信長と家康との聯合軍と戦い、信長の鉄砲隊にこつびどくやられて多くの宿将老臣を失つて以来の武田氏は、既に信玄時代の武威はなかつた。それ故、勝頼は家康に当るためにも、是非とも北条氏の力を借る必要があつたので、天正五年正月、北条氏と和し、氏政の妹を娶つて己の妻とした。

上杉謙信が、天正六年二月、卒中で急死すると、一生不犯だつた彼の跡を養子の三郎景虎と景勝とが継いだが、三郎景虎は氏政の弟であつた。勝頼としては氏政を味方とすることに成功し、更に上杉氏の力を借りることが出来ると大いに意を強くしていた。

ところが、景虎と景勝の二人の兄弟仲は不幸にして至って悪く、謙信の歿すると忽ち国中分れて二つとなり景虎、景勝は互に国を争って始終合戦の止むときがなかった。

こうした事情なので、二人の仲を和平にするためにも氏政は勝頼に景虎に加勢されるよう依頼したのであった。

そのうち景虎は景勝に惨敗して、遂に切腹してしまった。これを氏政は、勝頼が景勝に加担したため弟が殺されたと解した。殊にその七月、勝頼の妹、菊姫が景勝の室となると、北条氏一家の勝頼に対する怨恨は骨髓に徹し、氏政は勝頼に同盟の解消を通告すると同時に、一方使を家康に遣って勝頼を夾撃することを約したのであった。

徳川北条両者の隣好が固く結ばれた結果、孤立化された勝頼は焦慮の感をいだかざるを得なかったが、父信玄に劣らぬ謀略にたけていた彼は、徳川氏を内部から崩壊せんものと画策をめぐらし、支那人医師瀧敬を岡崎城に首尾よく送り込み、家康の室築山殿と武田氏のため通謀せしめることに成功したのであった。

やがてこの陰謀が露見すると、織田信長の強圧のもとに家康はやむなく家臣の手によって築山殿を小藪村で誅せざるを得なかった。

天正八年八月廿九日のことである。このことに連座した疑いで、家康の嫡子信康も翌九月十五日、二俣城に於て割腹せしめられるという家康にとっては重なる悲運を嘗めさせられたのであった。

しかし天正九年三月廿二日の遠州、高天神城の陥落は、勝頼にとっては致命的な打撃であった。

城を持たぬことを誇としていた武田氏も、ここに至って勝頼は甲府の西北の韭崎に城宮を築いて新府と呼び十二月廿四日ここに移ったが、これ以来、防禦の態勢をとらざるを得なくなった。

家康打倒の周到な計画も失敗に終わったが、勝頼は決して悲観もせず次の手段にとりかかった。

美男で武芸にも通じ、且つ豪胆でもある日頃寵愛していた小姓を、ひそかに傍近く呼んで、

「こと成就した曉には、そちを厚く取り立て

てやろうぞ」

こう云いふくめて、我が家臣の手前は、許せぬ罪があつたため打ち首にすべきところ、日頃の彼の忠勤に免して放逐に過したといふらした。

首尾よく家康の侍童として仕えることに成功した彼は、常にただ主君のよろこぶように気転よく立ち振舞ってひたすら歓心を求めていた。

一方、世なれた家康は、彼の侍童を警戒することもなく、又、心を許すこともなかった。

奥書院で家康が一人いる時も、かの侍童が常に傍にあつて用を足していたが、さすがに歴戦に鍛えただけあつて、悠揚として乗ずべき隙など一つもなかった。

日は容赦なく空しく過ぎて行つた。侍童は何とかして己の使命を、一日も早く果したいとあせり出した。昼間はそんな機会が全く見出せなかったので、所詮、夜る家康が就眠している時を襲うより外ないと想うに至った。ところが、その待ちに待った機会がやっと来たのである。(つづく)

家庭における

親と子の在り方(2)



その後、S夫人は、あれこれ策を施しても

かえってこじれるばかりなので、しばらく冷

却期間か置くことにして、面接はもっぱらS

夫人自身の問題に重点を置いて続けられました

た。問題とは言っても、実家のことを除けば

特に問題もなく、相談されたのは、現在続け

ている読書会を、どのように運営していった

らよいかというようなことでした。次の会合

にどんなテーマを選んだらよいか迷っている

のだが、自分達の会合の主旨に沿ったよい本

はないだろうかとのいとなので、家族の問題

に関する本を紹介した所、その著者を講師に

頼んで、研究会を開き、いろいろ家庭の問題に

ついて新しい勉強ができたとのことでした。

このようにして三ヶ月ばかり経った面接で

S夫人は次のようなことを話しました。

自分は何も問題がないと思っていても、カ

ウンセリングを受けることで非常に気持が軽

くなり、このような家庭問題が起きても救わ

れている。それにつけても継母は気の毒で

す。若いうちから本当によい後妻としてつと

めてきたのに、自分が実母に会ったことで裏

切られたと思ったのでしょうね。父も年とっ

て頼りにならなくなったし、後妻という不安

定な立場で継母はきつと将来が不安になって

あんなにとり乱したのでしょう。こんなこと

が起きた以上、自分としては完全にもとの白紙の関係に戻れるとは思いませんし、望みもしないので、何とか継母の不安な気持だけでも安定させてあげられたいと思う。それには何とか継母を説得して、カウンセリングを受けさせたらどうだろうか。それともあんな年になっては、もう気持を変えるなんていうことは無理でしようかというのです。

私は、S夫人のこの案に賛成しましたが、ともすると親切の押しつけがましい態度になりがちなS夫人に、それでは誤解されるばかりだからあくまでも本人の自由意志に任せるようにと注意しました。幸いなことに、継母のカウンセラーには僧職にある所長にお願いすることが出来ましたし、S夫人も上手に継母を説得したようでした。

継母はカウンセリングの意味などわからぬままに、それでも安心して自分の家の事情や立場についていろいろ訴えたそうです。その後、私共は、S夫人と継母、二人のカウンセラーと四人でジョイント面接を行いました。初めのうちはまだS夫人に疑いを持っていた継母も、四人で話し合ううち、S夫人の誠意

を納得できて、大変晴々とした表情で面接を終えました。

S夫人は、問題が一段落したので、面接を終りにしたいが、今時も何か問題が起きた場合、勝手ですがまた聞いて欲しいといって、継母をいたわるようにして帰って行きました

た。S夫人との関係は、かなり長い期間を要しながら、私自身はそれ程特別意識的に指示を与えるでもなく、まるでS夫人の経過報告ばかりのような面接でしたのに、とにかく風波が治まり、ただじつと傾聴することで相手の心に安心感を与えより賢明な態度を惹起す

という事実から、何か技術を越えた人間同志の接触というものの不思議さをあらためて実感したのでした。

大正大学カンセリング研究所

口 和子担当

現代語訳 歎 仏 頌

—その五—

吉 田 定 久

05 令我作仏

05 われ第一の

易い場であるという風に。

国土第一

国を立つ

06 国如泥洹

06 化楽も双び

07 十方来生

07 十方の国より

其衆奇妙

人々秀れ

而無等双

無からしむ

08 十方（全世界）の人で…聖人でも凡人でも、階級は問いません…

道場超絶

さとりを得

我当哀愍

我もろ人を

真心から喜んで私の国（許）に來たいと望むなら、其の来生（往生—更生）を皆認めます。

09 然し私は他のどの仏土よりも、遙かに理想的な国（浄土）を立てることに致します。

度脱一切

憐れみて、

そして浄土に到來した以上、誰でも清浄な化楽を受けて、安穩に生きられることに致します。

09 又、浄土には悲哀を伴う変化がない…安定した…云わば常楽の世界に致します。要するに光明も第一、人衆も第一、成仏も、化

楽（悟りから来る快樂）も第一で、他に双び

の仏土には見られない…最尊第一の…ものであるとか、浄土の人衆は量的にも、質的にも優秀であるとか、浄土はさとりの

質的にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

質的にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

質的にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

質的にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

の心にも優秀であるとか、浄土はさとりの

古河城主 土井 利勝 (一)



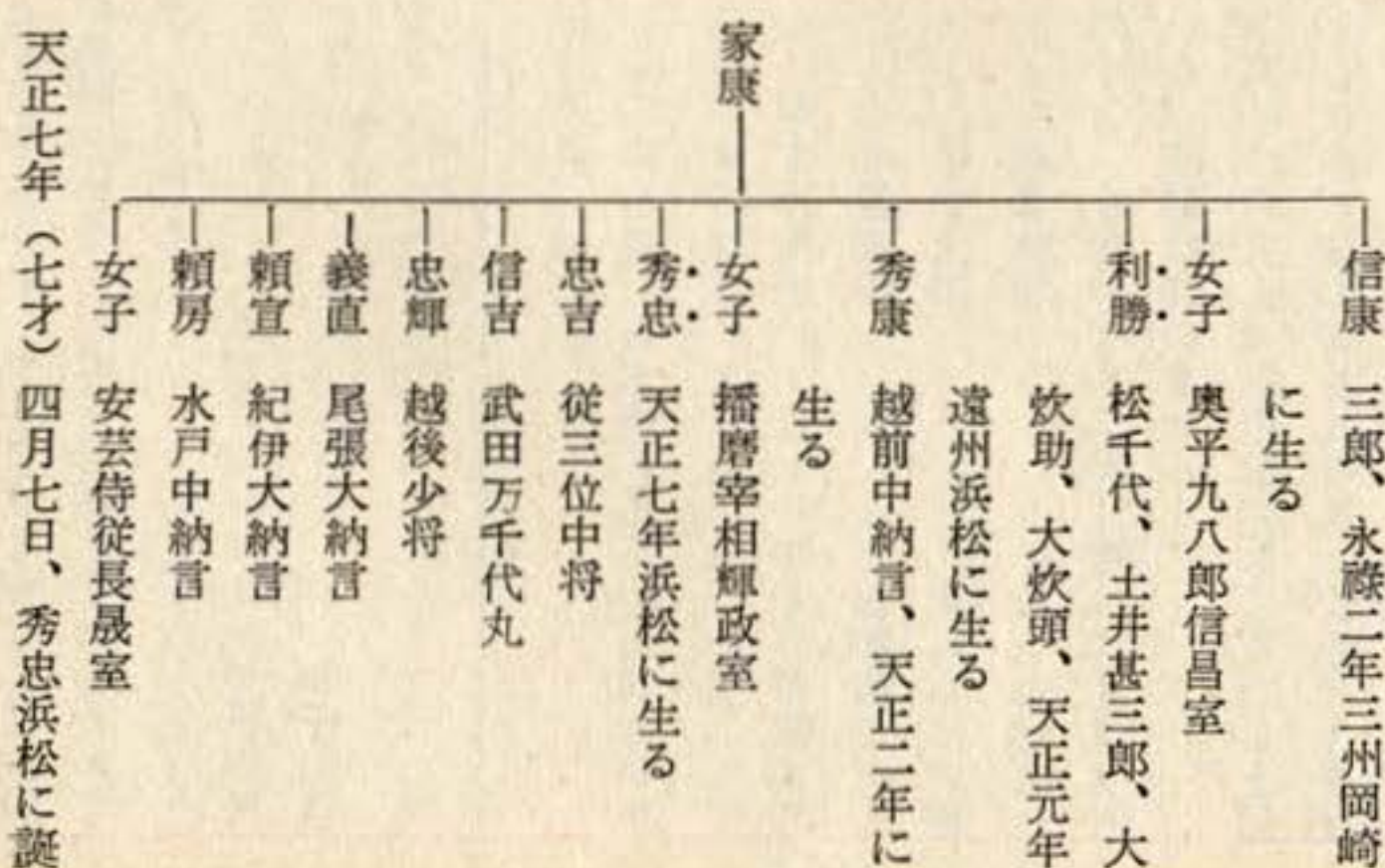
藤井 亮彦

土井利勝は天正元年三月十八日（一五七三年）浜松城に於て誕生、父は徳川家康にして母は三州の住人葉佐田美作守則勝の長女なり。幼名を松千代と言い相州広正の合口と御産衣を家康より拝領す、室町時代一〇六代正親町天皇の時なり。征夷大將軍は足利義昭、此の年武田信玄卒し、足利氏が滅亡した。

利勝三才の時母と共に土居小左衛門尉利昌の家に入り土居をつぐ、家康の命に依りて、土居の居を井と改め、土井とした。土井の家紋は水車、替紋は沢瀉なり、松千代を改めて利勝としたるは養父利昌の利と、母の父則勝の勝を合わせて利勝としたのである。利勝は甚三郎、大炊助、大炊頭と称した。

土井家御系譜に依ると、土井家は五十六代清和天皇を祖とし、義原氏時代天安二年（八五八年）藤原良房が摂政となった頃より始まり土井利昌に至っている。利昌は甚三郎、久藏小左衛門尉と称し、家康から五百石を賜わり岡崎城外南一里半の地土居村に住した。慶長三年九月十一日利昌卒す、宝光院殿本誓見貞居士と号す。御内室は慶長十三年七月十一日卒す、玉等院殿清誉寿安大姉と号す、始め

は何れも三州土居村の寺院に葬りしが、寛永七年七月十一日に総州（千葉県）佐倉松林寺に改葬した。松林寺は利勝の開基なり。家康を父とした利勝の兄弟は次の通りである。



生ず、此の時代は安土桃山時代、執政者は織田信長、天正六年（一五七八年）上杉謙信卒す、天正十年（一五八二年）本能寺の変、山

崎の戦あり、時代は豊臣秀吉へと移り、賤ヶ嶽の戦小牧長久牛の戦が相次いで起った。秀忠誕生し御七夜の日、家康の命に依り利勝は秀忠に奉仕す、家康より二百俵を賜わる。

戦して功あり、此の為相州本間、金田の両郷五百石の地を拝領す。

天正十八年（十八才）正月秀忠十二才の時、秀吉と御対面の為京都に行く、利勝供奉す、此の一五九〇年、小田原征伐家康江戸城に入る、次いで文祿元年一五九二年、征韓軍の出發があつた、天正は十九年にて改元、文祿となる。利勝に千石を賜わっている。

慶長六年（二十九才）十一月御徒士頭となる。

慶長十三年（三十六才）母堂七月十一日に卒す。

慶長七年（三十才）下総国（千葉県）小見川の地知行一万石を賜わり、城主となる。小見川は松平又八郎（主殿頭）忠利の所領であつた。秀忠の命に依り利勝に附属したる家臣は、

酒井茂左衛門、蒲田所左衛門、潮田勘右衛門、井出左治右衛門、中村茂右衛門、酒巻新兵衛、矢作喜兵衛、忍庄兵衛、水戸部四郎左衛門、蔭山忠三郎

慶長十五年（三十八才）四月七日下午総国佐倉城を賜わる。食祿三万二千四百石録、佐倉城を再築す、今田野の松は此の時植えしものなり、領地より召出されし者は

文祿四年（二十三才）三月関白秀次謀殺の時利勝は秀忠に供奉す。

倉祿各百石なり、利昌時代より勤仕の面々は

田付吉助、関主馬、大道寺久右衛門、早川弥五左衛門、野村喜内、青山善右衛門、小杉長兵衛、国府田甚兵衛、鷹見平右衛門、用土左治右衛門、大久保儀左衛門、山岸左治兵衛

慶長三年（二十六才）一五九八年豊臣秀吉薨御

大野仁兵衛、神尾半之丞、平尾市十郎、山上内膳、吉田金太夫にして、御譜代衆なり。

である、此の年秀忠、田原にて御集、利勝供奉す。

慶長五年（二十八才）一六〇〇年征夷大將軍徳川家康の實力を以て会津上杉景勝を討つ、秀忠江戸出發、利勝供奉す、七月二十四日下野国小山への使者となる。石田三成の反逆起る、濃州関ヶ原の戦なり、信州真田安房守昌幸、同左衛門佐幸村、上田城にあり、利勝善勝此れを名譽とす。

慶長八年（三十一才）江戸神田橋の内にて御屋敷を拝領す、徳川家康征夷大將軍となつた。

慶長十六年（三十九才）十一月九日、江戸芝増上寺源譽観智国師をして新田に赴かしめ新田大光院御建立の事相計る。新田は新田義重、同義貞の墳墓の地なり、新田累代の菩提所大光院を建立す。

慶長十年（三十三才）従五位下、大炊助に任ぜらる、大炊助とは新田義重の名なり、利勝此れを名譽とす。

慶長十七年（四十才）御加増一万二千六百石、三月二日、合わせて四万五千石となる。

利勝は家康の政治万端を勤め、駿府へ度々行く、家康より黄金千両を賜わる。（つづく）

三身即一の阿弥陀仏(一)

— 創価学会批判をかねて —



岡 本 薫

本尊の三義

今日は諸宗教が仲良くしてゆく傾向にある。これは大へんよいことで、もし宗教と宗教とが争うと宗教戦争をおこし、世界の平和はやぶれてしまう。まして仏教の内部において争うことがあれば、教祖釈尊に対して申訳ないことである。こういう意味から私は表題の三身即一の阿弥陀仏を説く。この阿弥陀仏とは別名を大日如来、あるいは釈迦如来とも申す。

宗教で最も大切なことは本尊様である。なぜならば、本尊から一切のものが現われるからである。本尊は物心両面の根源である。この本尊のことを哲学的には真如(しんにょ)と申す。

真如には三つの根本的意義がある。第一は「独尊」ということ、他に比べるものがない、独り尊いということ、即ち唯一の御存在であり、絶対的な尊さをもっているということである。「最尊第一」ということである。

何故に独尊であるかという点、すべてのものの根本であらせられるからである。よって

「独尊」とは「根本」ということになる。本尊のことを本仏というのは根本仏という意味である。

第二には「統攝」である。統一摂理ということで、バラバラになっているものを「しめくくる」ということである。太陽だ、地球だ、人間だ、男だ、女だ、石だ、木だ、というようにいろいろと異ったものが存在している。また心の方面から見ても、食欲、性欲、知力、感情、意志、さては至誠心、深心、回向発願心、あるいはまた鬼の心、餓鬼の心、畜生の心、菩薩の心、仏の心等いろいろ差別がある。

これらの物心両面におけるすべての差別あるものを一つにしめくくるのが統攝である。そしてしめくくるところは中心であるから、統攝とは中心ということになる。

第三には「帰趣」ということ。われわれ衆生が修行して帰着するところである。よって終局という意味をもつ。極楽浄土のことである。

真如(本尊)にはこのように独尊、統攝、帰趣という三つの意義がある。この三義をそ

なえた本尊のことを本有無作の仏と申す。本有とは本からあるということ。無作とは他のものによって作られたものではないということ。時間的には無始無終である。

三身のお役目

本有無作の仏のことを浄土門では阿弥陀仏と申上げる。この阿弥陀仏には三つの御はたらきがある。その御はたらきの方面から称して、法身、報身、応身と申上げる。これを三身と申す。三身のことについては従来浄土門でははっきりと説かれなかったので、目新しい感じがするかもしれないが、聖道門（禅宗、真言宗、天台宗、日蓮宗等）では説いている。今日においては浄土門においてもこの三身を説く必要がある。これを説くと本尊様の巾が広くなり、宗教を円満に理解する上に非常に有益である。

①法身。本身法身はすべてのものの根本であるが、その内面には偉大なる性能をもっている。それをたとえば、蔵があつて、その中に宝物が一杯おさまっているようなものであるから、法身のことを如来蔵という。その如

来蔵には大別して二つの宝物がはいっている。真言宗では、金剛界と胎藏界という。前者は陽性で、後者は陰性である。言葉をかえていえば、一切知と一切能とである。

一切知とは、秩序、法則の根本で、すべてのものに秩序を与える性能ということである。一切能とはすべてのものを活動させる性能ということである。両者を合わせて秩序的活動という。本有法身には、すべてのものを秩序的に活動せしむる力がある。この力が活動を初めるところを生産法身という。平たく言えば「産みの御親」である。三身の中の法身とはこういう意味である。法身の一切知一切能の協同作業により、太陽、地球及び地球の上に存在する一切のものが生じた。生物というならば、植物から動物、動物から人間というように進化的に生成発展をとげた。これが進化論であるが、進化の原因は、一切知である。初めは一切知が先に発達し、一切知の方はおくれて、次第に現われてきた。知の現われるにつれて進化したのである。知は秩序であるから、自然科学は自然界に現われている秩序を研究する。人文科学は人の心に現われ

ている秩序を研究する。

教育基本法に「……真理と正義を愛し……」とあるが、この真理とは科学の「学」のことであり、秩序のことである。創価学会では、真理の価値を否定しているから科学の価値の否定である。よって日本の国は野蛮国となる。亡国の思想をひろめており、しかも国法違反であるから、これは極めて重大な問題である。

本有法身（弥陀）から産まれた人間であるから、人間には仏の種がある。これを仏性という。

②報身。人間は法身から産まれ、仏性をもっているが、その仏性はまだ眠っている。その仏性を目ざませ且つ育ててくださるのが報身である。本有法身の弥陀には報身が本からそなわっている。故にこの報身もまた本有無作の御存在である。本願力のことであるが、本願の「本」は本有無作ということである。もとからあつて作られたものではないという意味である。西方の弥陀は指方立相ということで、西の方角を仮に示して本尊の仏を立てたのであるが、それは方便であつて、報身のこ

とをそのように説いたのである。

報身は美しき相を有し智慧と慈悲の光明を十方に放って念仏の衆生を摂取して下さる。

法身は「体」であり、報身は「相」である。

報身には「核」とも称すべき無数の靈応心があります。基督教では聖霊という。靈応身は陽性であり衆生の仏性は陰性である。陰と陽で

あるから互いに引き合って合一する。これを

神人合一、感応道交、入我々入という。見仏とはこういうことが念仏中に行われることを

いう。こうなったときを悟が開けたともいう。仏の種を自分の心に宿したのである。性

生活でいうならば、妊娠に相当する。念仏はここまでゆかなければ生きた、力ある信仰とはならない。それを証信という。確固不動の

信念となる。「智者の振舞をせずして只一向に念仏すべし」とは、こういう境地へ進めと

いうことである。しかしそれ以後ももちろん修行をつづけなければならぬ。報身を平た

くいえば「救いの御親」である。

③応身。法身、報身は存在しても、凡夫には分らないから、これを教える人が現われな

ければならない。釈迦如来はそのために現わ

れたまうたのである。この御出現を八相応化という。衆生を教え導いて仏道を行ぜしめるのであるから、「教えの御親」という、釈迦如来はすでに没せられたけれども、その御靈体は永遠不滅であり、靈応身として今もお生き、念仏者の心に宿って下さる。

創価学会では、釈迦を脱仏、死仏と称して

いるが、とんでもない阿呆である。地上に出現された釈迦仏を始覺の仏、跡仏といい、永遠不滅の釈迦仏のことを本覺の仏、本仏とい

う。法身でも報身でも応身でも本有無作の仏であるから、そのうちの一つを根本仏の地位へあげれば、その下に三身がつくことにな

る。

故に真言宗は法身の大日を本尊としているが、大日を本尊とすればその下に三身がつく。浄土門の弥陀を本尊とすれば、その下に

三身がつく。釈迦を本尊とすれば、その下に三身がつく。これをもって三身即一の本仏と

いう。故に大日、弥陀、釈迦は同体異名である。仏教の本尊の統一が出来たので、何も争

うことはなくなる。全日本仏教会の運動もこ

れによって出来る。

根本仏

大日如来
阿彌陀如来
釈迦如来

法身Ⅱ産みの御親—大日—真言宗
報身Ⅱ救いの御親—弥陀—浄土門

天台宗

応身Ⅱ教えの御親—釈迦—禪宗、

日蓮宗、天台宗

以上は弁榮聖者の教えによって記したものである。

業界一の銅瓦・銅板一般

模様葺・別製金具一式

私の先祖の宮及び寺の銅材一式手間代も寄進、神様仏様へ報恩の奉仕故御希望通り安く良く、他所にはできない何代も研究せる卓越せる最高技術最低価請負業者も悔なき様、御相談無料。

東京都文京区春日町一の九の二八

銅瓦職協会
相談役顧問
設計及監督

石黒工業

(電話812) 一五五一

無媒随録

須藤隆仙

創価学会がその存在を世にPRするため、絶好のお膳立てとなったのは、北海道小樽市でおこなった、日蓮宗との対論「小樽問答」であった。

この小樽市というところは、良い意味で大変珍しいところで、仏教信仰のまことに盛んなところである。各寺院の檀信者の教化もゆきとどいており、また在家仏教の盛んなところで、仏教講演会などでも、各地に見られぬほど盛況である。

この秋、小樽を訪れたとき、そのことが早くも在家仏教会の役員にキャッチされ、一夜講演を頼まれたのである。幸い本誌でも同じみの、大正大学の中村康隆先生もお出になられたため、講師は先生と私との二人で、私は中村先生の前座をつとめさせていただいて、

幸いなことであった。

私は『仏と凡夫』という題で話をした。これは長年私なりに考え込んでいた内容であって、各宗各層の人たちが集るこの会に、ぜひ発表してみたいと思ったのである。

仏は、「覚者」といわれるとおり、法を覚ったものである。すると法というものは、仏よりさらに以前に存在するもので、仏が世に出ようが出まいが、そんなことに関係なく法は常住するのである。その仏が、さらに「覚他」とか「覚行窮満」とかいわれて、覚らざる者（凡夫）を覚らしめていく、そこに凡夫から仏へ、または仏から凡夫へ、という仏教の宗教的活動が顕現されてくるわけである。

してみると、仏と凡夫というものは、対立した世界に住み、俗な言葉でいえば「月とすっぽん」ほども違う存在なのであるが、じつはそうではない。法を覚れるものが仏、さらにその仏が凡夫に法を覚らしむるということ、で、仏と凡夫は「法」を媒体として、深く深く、密に密に、結びつけられているのである。仏と凡夫は、じつは対立するものではなく一体であり、離れているものではなく密接

するものなのである。「宗教」の語源が「結合」であるというのも、この義において首肯されるし、阿弥陀仏は西方十万億土といいたがらも（小経）、「ここを去ること遠からず」（観経）といわれるのも、この一点に領解され、元祖上人が弥陀と私たち凡夫との出会いを、「水月を感じて昇降を得たり」（選択集）と仰せられたのも、ここに立っていたく信解の涙にむせばざるを得ないのである。

「仏と凡夫」と題して、私は大略右のようなことを語ったのであった。

つたない私の話ではあるが、聴衆が意外と喜んでくれ、各宗各層の人たちが集っているにもかかわらず、最後の挨拶が、彼我念仏の同称となったのも不思議であったし、大声で「有難うございました」

を発する壮年の姿も、私には逆に合掌させられるのであった。

仏と凡夫とが一緒になっている世界、それが仏教の窮極であろうし、禅も真言も、天台も日蓮も、みなここにおいて一枚であると、つくづく感じさせられたことである。

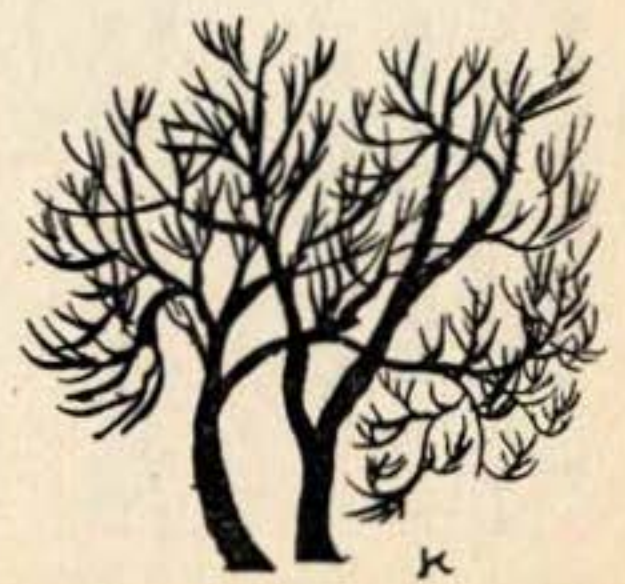
絵	連
話	続

みんなの法然さま

——往生をねがう人——

高橋良和

さしえ 小林健造



熊谷蓮生坊と同じ頃に津戸の三郎という武士も法然上人の弟子になっている。

数々のいくさに功名をたてた立派な武士であったが、この人も数々の合戦で手柄をたてただけに、人々を殺した罪をなんとかして懺悔（さんげ）したいと法然上人の庵を訪れたのである。

そこで上人はひたすら念仏をすすめると、関東武士であるだけにすなおにそのおしえに帰依したのである。

そこで誰れに遇っても、どこでも、ただ専心念仏を申すことが救われる道であると説いていたところ、ある人が、熊谷蓮生や、津戸の三郎などは、馬鹿正直であって、念仏ばかりをすすめているが、かしこい人には念仏ばかりでな

く、外の行をもしてよいとすすめてもかまわぬのに、となかばひやかし半分にいったことがあった。これを聞いた津戸の三郎は、これはおかしいことである、上人からおしえていただいたこととちがうのではないだろうか、と、不審をいだいて早速法然上人にたずねたことがあった。すると法然上人は、

熊谷入道や、津戸の三郎のような純真なものにこそひたすら念仏をすすめたので、いろいろな人間の智慧を働かしている人たちは念仏の外の行を行なってもよいと申したのである。ほんとうに余の行より念仏がどれだけすぐれているか、これこそあらゆる人々に通ずるのが往生浄土のおしえである。

という手紙を書きおくれたのである。

て、
これを受けとった津戸の三郎にその手紙をおしいただい



ほんと
うによ
かった
わたし
の申し
ていた
念仏に
はまち
がいが
なかつ
た。外
のこと
は思う
まい、
心を清
くして
ひたす
ら念仏

を申そうと、

心に決めたということである。

かくして武蔵の国において津戸の三郎は、念仏のおしえをひろめたのであって、関東地方における念仏のおしえが發展していったなかには、この熊谷蓮生坊と津戸の三郎の二人の力が大いにあったことを忘れてはならないのである。武蔵の国に三十余人の念仏の行人が出来たので上人にその旨を報告している文書がある。

これについて、上人はよろこんで、

三十余人の念仏の行人が出来たことはうれしいことであるし、また感心している。

とたよりを送っているが、荒っぽい関東にこの念仏がひろまったことは上人もきつとうれしかったことだろうと思うのである。

かくしてこの津戸の三郎も遂に上人のおしえのままに出家するのであるが、そのしるしに上人の所持している珠数を一ついただきたいと手紙を出すと、「つねに持ちて念仏したまえ」と珠数一連がとどけられてきたのである。

三郎いよいよよろこんで、出家してからの名を尊願と改めて関東で道をひろめることに努力したのである。

この尊願のことについて最後まで述べてみると、法然上人

が亡くなってしまつてからのことになる。

法然上人が亡くなったことを聞いてからは、日に日に極樂が恋しくなつてきたらしく、毎日毎日、法然上人からいただいた手紙をとり出しては上人のおしえを偲んでいたのであるが、尊願にはまた極樂からお迎えがこなかったのである。

十月二十八日から念仏をはじめた際に三七日もすんで丁度十一月十八日がいよいよおしまいの日である、というそのときに、淨く飾り、すっかり整えて、高声念仏したのであるが、そのときなにも思つたのか自ずから腹を切つて死んだのである。

念仏のありがたさに、早く極樂にまいりたいと自ずから生命を絶ちきつたのであるが、このようなことは昔にもよくあったことで、法然上人のおしえの上での師匠である唐の善導大師の時代にも、善導大師のはなしを聞いて極樂にあこがれをいだいた人が、その門前で自殺したといった記録が唐高僧伝のなかにもせられているのであるから、この津戸三郎が腹をかき切つたということも、きつと極樂にあこがれたからのことであると思うのである。

立派な念仏の行者であつたと後世に語りつたえたいことである。

ところがこの津戸の三郎はさすが武士であつたから腹をか

き切ると共に、自分の五臓六腑をとり出して、夜中のことであつたが、それを河に捨てさせたということである。

勇氣があつてほめてよいのか、無謀なことか、今の時代からはちよつと判断にくるしむ出来ごとであるが、御本人の曰く今まで往生せずして、この世に住っているのは益のないことである、今日に念仏の結願の日である、今日往生すればまことに目出度きことである、極樂には必ずまいるから、といっている。

法然上人も必ず極樂に生れるであらうと証明しているが、まことに見事な大往生であるといえる。

熊谷といい、この人といい、まことに往生の見事さはいうまでもないが、法然上人の弟子の鎮西上人（ちんぜいしょうにん）は、

このように自ずから生命を絶ちきることは、これから後の世では誠しめなければならぬ、生命をもっともつと尊重するのが、上人のおしえである。

とさとしている。

時代が異なると、いろいろなことにふれるが、上人のおしえは、自分の生命も、他人の生命も、そして虫や、いきもの生命を大切にすること、そして人間の生命の最後のときまで、念仏行を行ずることが上人のおしえの大切なところである。

「法語をいただく」

念仏往生は、機にあたり、時を得たり。感応あに唐捐（とうえん）ならんや。

（選択本願念仏集）

いかに貴重なものでも、それを持つ者によつては何んの役に立たないことがあります。猫に小判をやっても意味がないわけでありまゝす。またいかに立派なものでも、自分のものにならぬなら、ないのと同じことになります。高嶺に咲いた花がいかに美しくとも、自分のものにすることができません。

それと同じようにいかに高遠な哲理があつても、誰もが理解できるとは限りませんし、理解し難いものであれば、自分の役にたたせることができません。また立派な修行方法があつても、それが難かしければ少数のものゝ修行となることがでましても、凡人にはとても及ばぬものであります。

ところが念仏を唱えることは誰でもが、いつでも、どこでもできる修行ですから、これこそ万人の修行であり、しかも極楽に往生

できますから万人の信仰になり得るものであります。

このように念仏を唱えて往生を願う信仰はすべての凡夫に適しているし、現在のようゝな混乱の世相、悪のさかんな時にあつても適している信仰であります。

感応とは物ごとに感じて動くことですが、信仰のまことが仏さまに感じ通ずることでありまゝす。従つて念仏を唱えれば、阿弥陀さまがお聞きになつて下さることをいいます。また唐はむなしく失うことであり、捐は捨てることですから、唐捐はむなしくすて去ることでありまゝす。

従つて念仏を唱えれば、それが直ちに阿弥陀さまに通じて、決して見捨てられることがないという意味であります。

他のご法語に善導大師の

「衆生行を起して、口常に仏を移すれば、仏即ちこれを見たまう。身常に仏を礼敬すれば仏即ちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば仏即ちこれを知りたまう」

という親縁の説明を引用し、更に「御手にずしもたせ信じて候はば、仏これを

御らん候べし。御心に念仏申すぞかしとおほしめし候はば、仏も衆生を念じ信ふべし」

ともつと具体的に、もつと詳しく申しきています。手に数珠を持っただけで、まだ仏さまを礼拝していないのに、仏さまは早くもその行者をごらんになつてゐるというのです。

心にお念仏を唱えようと思い、まだ念仏を唱えていないのに、仏さまはすでに行者を念じ給うてゐるというのであります。

これこそ「阿弥陀仏の三業と、行者の三業と、かれこれひとつになつて、仏も衆生もおや子のごとくなる」と申される通り、お念仏を唱えるものと阿弥陀さまとは、全く一体となつてゐることでありまゝす。これが即ち感応ということでありまゝす。一つの動作が、そのまま他の動作となることでありまゝす。

法然上人はあらゆる書籍を読破し、あらゆる高僧に教えを求め、しかも「ここに我ら如きは、すでに戒定慧の三学のうつわものにあらず」

といわれました。戒定慧三学とは上人以前の仏教のことでありまゝす。まして凡人にはお念仏の外に救われる道がありません。

編集後記

▽仏教と社会事業との因縁
浅からぬ歴史については誰しも知っています。それだけに現代の仏教が実社会への働きかけに欠けているという反省と批判がなされがちです。こうした傾向の中にも、一筋に社会事業に貢献している僧侶のあることを忘れてはなりません。

▽今月は「社会事業」の特集として、故長谷川良信師と小川金英師の例を紹介しました。長谷川師の御冥福を祈りつつ師の遺業を偲んで吉野翠幹氏に執筆をお願いしました。小川師の夜昼銀行は、考えついてもなかなか実行できることではありません。こうした活動が盛んになることはまことに望ましいことです。

△かつて浄土宗は社会事業宗といわれたほどこの方面に力を注いだ。それは、未開拓の分野であった社会事業に先駆の役割を果たした。実は、浄土宗門人であった。渡辺海旭、矢吹慶輝両先生をはじめとし、とくにそのあとをうけ継がれたのは長谷川先生です。その遺風は大正大学の社会事業研究室にも伝えられ、今後に期待できそうです。

▽こんど真野正順博士の遺稿が出版されます。かつて先生が半世紀にわたり浄土誌をはじめ他方面に発表された原稿を集録して「日本人の信仰と生活」として出版されます。

▽無媒随録の執筆者の須藤隆仙氏が、こんど「日本仏教の研究」を上梓されました。北海道における郷土史

家として最近とみに名声を馳せている著者が永年の研究成果の一部として発表されたものですが、一層の氏の活躍が期待されます。

▽編集同人の佐藤行信君が十月十九日より一ヶ月間ヨーロッパへ出張されます。全日本仏教会よりの派遣で七ヶ国ほど主要都市を回り、東西の宗教文化の交流を深めてこられる由、帰国が待たれます。

▽同人の佐藤密雄、佐藤良智、中村康隆、竹中信常、村瀬秀雄、安居香山、宮林昭彦、佐藤行信の面々箱根に一夕集い、浄土の現在と未来について意見を交換しました。浄土は大衆のものであり、みんなに愛され読まれる雑誌であるよう努力するとの結論、一層の御支援をおねがい致します。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年十月二十五日 印刷

昭和四十一年十一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

怠ることなく精進せよ

——木魚のいわれ——

現代人は音楽というと、西洋的なもののみを連想するが、仏教の法要に用いる木魚なども楽器の一種である。静もりの中に一定のリズムにのって打ち響く木魚の音は、ここに沁み入るものを感じる。

それは単に音や響きばかりでなく、木魚のもついわれが働くからであろう。どんな



意味あいがあるの
だろう
か。こんな
寓話がある。
むかし
インドに
一人の修
行者があ

り、いつも怠けてばかりいて、師匠の教えをまもらなかった。やがてこの修行者は死んで一匹の大魚となった。

この苦しみを救って下さい」といって死んだ。そこで、師匠は木魚を作って、お橋（ひつ）とし、その腹部をたたいて大魚の苦しみを救ったというのである。

た。背中の上に一本の木がはえて非常に苦しみ、ことに風のある日は、波が立って背中の大木は揺れて血が流れ出る苦しみに会った。その大魚は、これは前生に師匠の教えを守らなかった報いと考えて、師匠を非常に恨んだ。ところが、その師匠が折しも、船に乗ってこの海を渡った。そこで、大魚はこの船を覆えして恨みをはらそうとしたので、師匠は「なぜ、お前は私に危害を加えようとするのか」と問うた。魚は「私はあなたの教えを守らなかったために、このような苦しみを受けているからである」と。師匠は「それは私の罪ではない、お前が教えを守らなかったためで、それは自業自得であることを、よく考えてみなさい」とさとした。

木魚は本来は、三度の食事の時に用いたものであるが、中国の明の時代以来、お経を読む時にたくようになり今日に及んでいるといわれる。

また一説には、だれしもとかく居眠りがちで、修行は怠け易いものであるが、魚は昼も夜も眼をあけたままで眠らない。その魚に、なおむち打って努力精進するようにと誡めるために、魚の形ちをした木をたたくのである、ともいわれる。

ともあれ「すべてのものは移りかわり、変化していく。怠ることなく精進せよ」という、み仏の遺誡を体験するために、今日も木魚をうつのである。

魚は、ついに師匠の言葉を理解して、「どうか私の背中の木を伐って木魚を作って、私

藤 吉 慈 海 編

新 刊 往生浄土の理解と表現

浄 土 シ リ ー ズ 2

B 6 版 本文 302 P

定 価 400円

〔目 次〕

一、問題の所在を追究したもの

峰島旭雄他一名

二、伝統的な理解と表現に近いと思われるもの

阿川貫達・林隆碩・千賀真順・佐藤良智他五名

三、正統的理解と表現への反省を示すもの

椎尾弁匡・恵谷隆戒・三枝樹正道・伊藤宏天・中村康隆・竹中信常他
二十五名

四、各種年令層への表現のしかたを示すもの

一条智光・小林義道・高橋良和・田中木又他二十名

発 行 所 知恩院浄土宗学研究所

◆年末・年始の施本にご利用を◆

修 養 ひ め く り

価 100円・〒50円 用紙33枚

タテ37cm ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費

見本は入用の節は 150 円お送り下さい

浄 土 宝 暦

価 30円・〒15円 40ページ

50部以上より単価25円 送料実費

東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発 行 所 法 然 上 人 鑽 仰 会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和四十一年十月二十五日 印刷 昭和四十一年十一月一日発行
(毎月一回一日発行)

浄 土

第三十二卷

第十一号

定価金六拾円(送料六円)